

氏名(本籍)	なか やま とおる 中山 徹 (茨城県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第2352号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	ジェイムズ・ジョイスの反美学 - 『ユリシーズ』における身体, 知覚, 言語 -
主査	筑波大学教授 博士(文学) 加藤 行 夫
副査	筑波大学教授 博士(文学) 荒 木 正 純
副査	筑波大学准教授 佐野 隆 弥
副査	筑波大学准教授 博士(文学) 山 口 恵 里 子
副査	筑波大学名誉教授 博士(文学) 川 口 喬 一

### 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、『ユリシーズ』(Ulysses)におけるジェイムズ・ジョイス (James Joyce) の反美学的な実践を、身体と知覚をめぐる主題および言語のレベルにおいて解明することを目的としている。

序章では、レイモンド・ウィリアムズおよびテリー・イーグルトンの文化論、オスカー・ワイルドの美学論、ヴァルター・ベンヤミンの複製芸術論を参照することによって、19世紀後半から20世紀初頭の身体、知覚、言語の問題を横断的に論ずるための歴史的・理論的枠組み-美学=カルチャー=モダニティの三位一体の構造-を設定する。また、本論文の試みと精神分析批判、脱構築批評との共通性を説明することによって、本論文の基本的立場、理論的枠組み、問題解決の方法を明確にしている。

第一部(第一章から第三章)では、20世紀転換期の西欧で爆発的な人気を誇ったボディビルダー、ユージー・サンドウのフィジカル・カルチャーと、性科学のパイオニアであり著名な文明論者でもあったハヴロック・エリスの優生学を一種のカルチャー、すなわち身体、芸術本能、子供、遺伝素=家系、等々の<sup>カルチャー</sup>培養にかかわる言説として位置づけながら、モダニティを否定的媒介とした、優生学と美学の協働関係が記述される。そのときジョイスの反美学は、この優生学=美学からの逃走と逸脱、それに対する抵抗とゆさぶりとして描き出される。

第一章では、『ユリシーズ』を、サンドウの<sup>フィジカル・カルチャー</sup>身体培養が生み出す言説ネットワーク(医学-水泳-ヘレニズム-優生学の相互連関)を再現したテキストとして読む。具体的には、主人公ブルームの行動と主要登場人物マリガン思想をそのネットワークの表象として解読し、もうひとりの主人公ステューヴン・ディーダラスの「水恐怖症」をそこからの逃走の形態として解釈する。

第二章では、『ユリシーズ』をエリスの三つのカルチャー(芸術本能の培養、小児培養、遺伝素培養=家系培養)を独自に再構成したテキストとして読み、「新しい女性的男性」ブルームの出産とその妻モリーの「恋人リスト」がオットー・ヴァイニングの哲学を取り込みつつエリス的優生学から逸脱するありようを分析する。

第三章では、エリスの性科学やジョージ・バーナード・ショーの教育論を通じて芸術の優生学的価値の確保に貢献する美学の機能を考察した上で、その機能が『ユリシーズ』においていかに疑問に付されているかを論ずる。その議論において、ブルームの「社会再生論」が、新たな解釈のもとで、反美学的、反優生学的主題の極致として提示されている。

第一部がカルチャーと美学の結合、あるいは前者による後者の取り込みに焦点をあてるとすれば、第二部（第四章から第六章）は、美学によるカルチャーとモダニティの取り込み、カルチャーとモダニティの美学化が中心の問題となる。美学化とは、内容的には、対象をそれにまつわる生理的反応や認識的、道徳的関心から切り離して「観照」することを意味し、形式的には—とくに第二部で扱われる事例においては—対象を、それに対する例外的な位置（メタレベル）から全体化するという操作を意味する。優生学を支えるこの美学的な無関心性が複製技術時代という歴史的地平においていかに不可能なものであるか、そしてそのことをジョイスがいかに描いているか、ということが第一部の論点であったが、第二部では、例外化による全体化という美学の原理に対して、ジョイスのテキストがいかに非例外化による非全体化という反美学的な論理を作動させているかが論点となる。

第四章では、カルチャーの美学化の例としてアイルランド脱植民地化論の中核である脱英国化論に注目し、そこで展開されたアイルランド名の培養をポール・ド・マンの言う「美学イデオロギー」として位置づける。それに対して、『ユリシーズ』における名前は、「詐欺」と規定されることによって非全体化と非例外化の作用を受け、結果的にテクスチュアルな自己分裂へと導かれていく。本章は、そのとき名前を通じて現れる文字や音節の戯れに、「美学イデオロギー」にあらがう言語の「物質性」を見出す。

カルチャーの美学化が文化ナショナリズムの基盤であるという前提に立てば、最後の二章が扱うモダニティの美学化は、ベンヤミンが言う意味での「ファシズム」の原理であると言える。

第五章では、ブリティッシュ・モダニズムにとって重要な意味をもつ二つの美学、ロジャー・フライの「観照」の美学とT・E・ヒュームの「古典主義」が全体化と例外化という視点から分析される。とくにフライは、視覚的モダニティ（都市のスペクタクル）を美学化しようとした。一方、ジョイスにおいて視覚的モダニティは、「観照」を不可能にする「ショック」として機能する。本章はこの「ショック」をJ・P・サルトルやジャック・ラカンの議論をふまえて「眼差し」として位置づけ、ブルームの散漫な知覚と『ユリシーズ』特有の反復システムを「眼差し」の効果という視点から解釈する。

第六章では、イタリア未来派、とくにルイジ・ルッソロによる聴覚的モダニティ（都市のノイズ）の美学化とその政治性が論じられる。『ユリシーズ』におけるノイズ音楽の主題と実践は、明らかに未来派の影響下にあるが、しかしそこには同時に、モダニティの美学化としての「ファシスト・モダニズム」に抵抗する論理とテキスト性が存在している。本章では、未来派美学を取り込みつつ解体するそうしたジョイスの反美学的実践を、『ユリシーズ』第18挿話におけるモリー・ブルームの知覚と意識の流れのなかに探求する。

以上のように、本論文は、美学を歴史から切り離された自律的なものとして扱うのではなく、つねにカルチャーとモダニティとのかかわりにおいて論じている。また身体、知覚、言語について語るときも、それらを経験的なものとして了解するのではなく、美学、カルチャー、モダニティという問題系が交錯する場としてとらえる立場に立つ。これによって、本論が扱う身体、知覚、言語に関する特定の社会的言説もまた、その三つの系の複合体として分析されることになる。本論文が目指すのは、美学が、身体と知覚を取り囲む歴史的枠組みの内部でカルチャーおよびモダニティの問題とどのように絡みあっているか説明することであり、美学がカルチャーの危機の解決として、あるいは身体・知覚・言語に対するモダニティの脅威の克服として原理的にどのように機能するか吟味することである。反美学とは、美学の否定あるいは芸術の否定ではなく、美学＝カルチャー＝モダニティという三位一体の解体であり、美学化の原理に対する批判である。本論文は、ジョイスの『ユリシーズ』を、そうした反美学的実践を成し遂げた類まれな文学作品として評価し

ている。

## 審査の結果の要旨

本論文は、『ユリシーズ』を中心としたジョイスの創作のプロセスに作用した、さまざまな広義のカルチャーのせめぎ合いと、そのカルチャーの解剖によってジョイスが提示を試みたメッセージの解明を目指しており、同時に、19世紀末から20世紀初頭にかけての、モダニズムの文化史的記述ともなっている点に特色がある。著者は、美学＝カルチャー＝モダニティという三つの問題系の相互交渉の観点から考察を進め、ジョイスがその時代の諸言説といかに接触し交渉したかを丹念に描き出し、それらを臨場感を持って分析的に記述している。

本論文は、身体史の立場から、ジョイスとの関連がある優生学や体操の文献資料を丁寧かつ詳細に読み書き、身体が管理される方向に向かう軌跡や、身体退化を恐れるがゆえに身体の鍛錬に向かう軌跡を追跡しつつ、それらの『ユリシーズ』への影響を指摘した極めて意義深い研究である。『ユリシーズ』は身体の管理と鍛錬とは逆行した方向を向く作品であり、著者はそれを反美学と呼び、身体がいかに知覚的であり、物質的であり、身体みずからのノイズを聞くものであるかを見事に論じている。

著者は、ベンヤミンの複製芸術論、ド・マンの美学論、カランの視覚論を、『ユリシーズ』解釈のみならず優生学、文化ナショナリズム、モダニズム美学をめぐる言説分析のなかに本格的に導入しているが、そのことはジョイス研究あるいはモダニズム研究における方法的革新として高く評価できる。

具体的には、従来指摘されるにとどまっていたジョイスの反優生学が、原理的かつ歴史的に解説されており、これは優生学とモダニズムをめぐる研究への大きな貢献と言える。また、単なる技術的な読解の問題として処理される傾向にあった『ユリシーズ』特有のテキスト性が、反美学という新たな視点から解釈されることにより、言語の物質性などモダニズム文学一般にとって重要な諸問題に接続された。さらに、これまでほとんど論じられなかった『ユリシーズ』とモダニズムの視覚美学および未来派の聴覚美学との共通性および差異が緻密に分析されたことにより、『ユリシーズ』に胚胎されたファシスト・モダニズムへの抵抗の動きを理論的かつ歴史的に解明する道が提示された。

ただ、優生学からアイルランド脱英国化論、そしてモダニズム美学、未来派音楽にいたる多様な言説を「観照」という概念を用いて分析するこの論文の特質は、美学のもつ広範な政治的機能を浮き彫りにすることができた反面、その概念や用語に過剰な意味的負荷を与えることになり、結果的に不要な読みにくさ、難解さを生み出している。また、本論文の趣旨からやむをえないとはいえ、テキストからの引用が作品論としては量的に十分とは言えず、作品全域を射程に収めていない印象を与える。

このような課題は残されているものの、本論文の価値がいささかも損なわれないのは、その理論的深みと思想的高みのためと言えよう。旧来の文学研究の枠組みを超えて文化的諸現象を広く論ずることで新たな地平を果敢に切り開いた本論文がジョイス研究の今後の発展に寄与するところは多大である。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。